

遣唐使けんとうし（頼らい 山陽さんよう）

遣唐使けんとうし 留學生りゅうがくせい

臣清河しんきよかわ 臣朝衡しんちようこう

使つかいする 所ところは 何なんの 命めいぞ 學まなぶ 何なんの 道みちぞ

顔かんばんせあり 能よく 結むすぶ 李家りかの 纓えい

猶なほ 知しる 頭こうべを 回めぐらして 出しゅつげつ月づきを 望のぞむ

月つき 出いずる 處ところ 即すなわち 日ひ 出いずる 處ところ

日光にっこう 明めい明めい 海かい光こう 濶ひろし

遣唐使 留學生

臣清河 臣朝衡

所使何命學何道

有顔能結李家纓

月出處即日出處

猶知回頭望出月

日光明明海光濶

解説 阿倍仲麻呂が遣唐使として出国した事を述べた詩。

語釈 ※遣唐使けんとうし ※臣清河しんきよかわ 藤原清河のこと。 ※臣朝衡しんちようこう 阿倍仲麻呂のこと。 ※李家りか 玄宗皇帝の名は李隆基である。 ※望出月 仲麻呂が明月を望み「天の原」の和歌を詠じたこと。

通釈 遣唐使又留學生は、何の為に彼の国に使いし、如何なる道を学ぶ為に行つたのであるか。己の使命を忘れ、己の本分を忘れて、唐朝の衣冠を着け、唐朝の禄を食むとは何というよい面の皮であろう。とは言え「天の原…」の歌を詠んだのを見れば、全く祖国を忘れたと言うのでもないようである。その月の出ずる処は即ち日の出ずる処であり、日の出ずる処即ち我が日本の本國である。そして我が日本の皇統は、明々たる光と共に千秋萬古限りなく、また窮まりなく四海を照らしているのである。